

■函館に初めて入った外国船

この頃から日本近海へのロシアの南下が目立つようになり、安永 7 年(1778 年)には、ロシア船が蝦夷に立ち寄り通商を求めるといふ出来事も起きました。またロシアはそれ以前にも、当時帰属が確定していなかったカラフトや千島列島にたびたび進出し、日本との間で小さな衝突が起きていました。

寛政 4 年(1792 年)、ロシア船は再び蝦夷に姿を現し、根室に入港しました。上陸したロシア使節ラックスマンは、ロシアに漂流した日本人・大黒屋光太夫らを送り届けると共に通商を求めました。松前藩は急ぎ江戸に使者を送り幕府の裁断を仰いだものの、幕府でもなかなか結論は出ませんでした。

翌年(1793 年)になり、とりあえずラックスマン一行と松前で会見することとなり、幕府の船が根室から箱館近郊の砂原(現在の森町砂原地区)まで先導し、そこから上陸して陸路松前に行くことに決まりました。しかしラックスマン一行を乗せたロシア船は途中ではぐれてしまい、しばらくしてから箱館港に入港しました。この船・**エカテリーナ 2 世号**こそ、箱館港に初めて入港した外国船です。予定外の箱館入港を幕府の役人に問われたラックスマンは「水先案内人の不案内と風向きのためしかたなく入った」と答えています。一行は箱館に上陸し、10 日ほど滞在しました。

■函館、外国船に揺れる

文化 4 年(1807 年)、諸外国の脅威を恐れる幕府は蝦夷地を松前藩から召し上げ、蝦夷全島を幕府直轄にします。間もなく、ロシア船が樺太とエトロフを襲撃したとの知らせが箱館に届きました。襲撃者は略奪を行い家屋を焼き、この地をロシアの領土とするとの書き札を残してきました。これを受けて箱館奉行は江戸に急ぎ使者を送り、この報を受けた幕府はかねてより蝦夷地の警備に就いていた南部・津軽両藩に兵の増強を達し、あわせて秋田・庄内両藩にも出兵を命じました。そうこうしているうちに外国船を箱館近海で見たとの知らせが箱館に届き、ほどなくして外国船が箱館に姿を現しました。外国船が次第に近づいてきてその姿がはっきり見えるようになると、帆の数が 11 もあり 1 万石船に相当するほどのかなり大型の船であることが判明しました。

この時箱館には厳重な警備体制が敷かれました。兵が数百人、役人と百姓を合わせてやはり数百人が不眠不休で 3 日 3 晩海を見つめて警戒し続けました。

街は老人・子供を箱館山に避難させようと大混乱し、人々は具足・武具を争って買い求めました。警備に就いていない武士は鉄砲を枕元に置いて眠り、風呂屋の棚は脱いだ具足で埋まったと記録されています。幸いにも外国船は何事もなく箱館を去ったため、この騒動は収束しました。

■高田屋嘉兵衛の活躍

淡路島出身の人・**高田屋嘉兵衛**は 28 歳で回船問屋「高田屋」を開業。蝦夷地での交易に大きな可能性を見出し、寛政 10 年(1798 年)に箱館に支店を設けました。高田屋嘉兵衛は幕府と深く関り、当時難所とされていた択捉航路の確立や北方の漁場の開発などの偉業を次々と成し遂げました。

寛政 12 年(1800 年)には高田屋嘉兵衛は幕府の蝦夷地定雇船頭(えぞちじょうやといせんど)となり、苗字帯刀を許可され、事実上の天下御免として蝦夷地の交易を一手に差配しました。

箱館は海が荒れず天然の良港であったものの、実際には遠浅で必ずしも船が着きやすかったわけではありませんでした。そこで幕府は箱館の港の改良工事に着手することとなり、文化元年(1804 年)に大規模な埋め立て工事を行いました。この時高田屋嘉兵衛は造船所の併設を願い出、ここに蝦夷地で唯一の造船所が完成しました。さらに高田屋嘉兵衛は幕府の埋立地の隣に自らも埋め立て工事を行いました。

この埋立地は築島(つきしま)と呼ばれ、函館の古地図には四角く海に突き出した姿が描かれています。高田屋嘉兵衛はその後も箱館に尽くしました。

嘉兵衛は箱館の家屋のおよそ半数に当たる 350 戸が焼失した文化 3 年(1806 年)の箱館大火に際し、必要な材木を津軽や秋田から仕入れ、儲けなしで提供しました。さらに必要な住人には米や古着を分け与え、長屋を建てて家を失った人を住ませたそうです。また、箱館の水不足を解消するため自費で大坂から井戸掘り職人を呼び寄せ、箱館に 7 ヶ所の井戸を掘らせこれを町に寄贈しました。このとき高田屋嘉兵衛 39 歳。このほか自費で道路の改修や植林事業を行うなど、地域と共に発展していこうとする高い志を示し続けました。この後も高田屋嘉兵衛は官船の建造や北方警備のための東北諸藩の兵員輸送を行うなど、幕府の海運・北方政策に大きく貢献しました。本来の海運業でも東蝦夷の貨物の大部分を箱館に集散させ、何もなかった箱館の港を蝦夷で最も栄えた港とするまでに育て上げた函館の恩人です。

■ペリー来航、そして箱館開港

嘉永 6 年(1853 年) 6 月 3 日、アメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが軍艦 4 隻を率いて浦賀に現われ、大統領からの国書を幕府に提出しました。この際にアメリカが要求したのは、「通商」「漂流民の救助・保護」「避難港の確保と石炭・薪水などの補給」の 3 点でした。幕府は確たる方針を定めることができずに国書を受け取り、一旦ペリーらを去らせました。

安政元年(1854 年) 1 月、ペリーは再び軍艦 8 隻を率いて浦賀に来航し、前年に提出した国書に対する回答を要求しました。

この時アメリカは交易のため幾つかの港を開くこともあわせて要求しました。どの港を開くかについてはペリーと幕府との間で話し合いが持たれた結果、下田と箱館の 2 港が物資の補給および漂流民の保護・救助を行うことのできる避難港として決定しました。これにより 3 月 3 日に**日米和親条約**が締結され、箱館は翌 1855 年 3 月から開港されることになりました。条約を締結したペリーは交渉地の下田を去り、その足で箱館に向かいました。当時蝦夷地は再び松前藩領に戻っていましたが、ペリーの箱館来航に先立って松前藩は領民にお触れを出しました。

すなわち、「アメリカ人は欲深く短気であるため外国船滞泊中は婦女子の外出を禁ずる」「婦女や子どもを山に避難させる」「牛、酒、呉服、小間物その他大切な物はアメリカ人の目に触れないようにする」「外国船の見物禁止、海に面した戸や障子にも目張りをする」「アメリカ人が何かを見て欲しがったら、逆らわずに与えること」など。さらに松前藩は箱館港にぐるりと高さ約 2 メートル余りの板塀を建て、海から市中が見渡せないように、また市中から海が見えないようにしました。

アメリカ船が箱館に入港したのは 4 月 15 日。翌日から港内の測量を行いました。

21 日にはペリーが乗艦する船も箱館に入港。松前藩応接方に幕府役人を加えての会談が行われましたが具体的な進展はなく、5 月 8 日に艦隊は箱館を去ります。この間ペリー一行は箱館の市中を見学し、また買い物を楽しんだようです。またペリー一行はこの際に日本の動植物を多数収集し、後に調査・研究しています。

ペリー一行が箱館に停泊している間に 2 名の水兵が病死するという出来事もありました。彼らは仲間によって箱館の地で弔われ、その墓は今も船見町の外人墓地の最も道路ぎわに海の方を向いて建っています。

安政 2 年(1855 年) 3 月、日米和親条約に基づいて箱館は開港しました。

永らくお待たせいたしました、ベストセラー作家熊谷氏による…アンカーライト…いよいよ来月より連載再開!!